

や図を腐蝕銅版の技法で作ったというだけのもので、そこに銅版技法を通しての洋風画への傾斜というほどのものは認めるとはできない。」(『日本銅版画の研究 近世』美術出版社、昭和四十九年四月、四〇三頁)と一顧だにせず切り捨てているが、それはあまりに一面的で皮相的な見方ではないだろうか。確かに西洋の銅版と比較すれば、彼我の差は大きく、拙く、平面的な感否めない。しかし、江戸という時代状況の中でそれを見た時、「日本的な銅版画」の姿が醸し出された稀少な作品の一つであるといえよう。そして本図版の制作年代だが、文政二年の序を持つ『瘍科精選図解』中にある口絵とよく似た作風に見受けられることや、西村の言うように文政元年に浜主の演舞が再興されたことから勘案して、おそらく『一宵話』の初版が刊行されたと思われる文化七年頃の制作ではなく、文政初年頃とするのが妥当かと思われる。

前述の森が指摘するように、『一宵話』は同一の版を使用しながら、幾本もの異版が刊行されている。度重なる異版の刊行意図を測りかねるが、あるいは筆者の架蔵本は、熱田神宮での浜主の演舞の再興を記念したもので、末尾に第三篇にあつた跋文を付すことよって、独立した一書として『一宵話』と切り離して刊行されたものであつたのかもしれない。

もうひとりの tom

森 仁史

一九二〇年代のアヴァンギャルドに関心のあるものなら、tomといえは村山知義を思い起こすであろう。しかし、私の知る限りでtomを名乗ったもうひとりの男がいた。西川友武という。

西川は開設されたばかりの東京高等工芸学校の工芸図案科を一九二四

年に卒業し、しばらく日活京都撮影所で働き、この時に「京子と倭文子」(菊池寛原作「第二の接吻」阿部豊監督、一九二六年)で村山デザインの設定を制作するというニアミスを



1 西川友武「開校記念絵巻書」

演じている。その後、一九二八年に商工省工芸指導所にはいった。ここでは機関誌『工芸指導』(一九二九〜三二年)、『工芸ニュース』(一九三二〜四四年)の編集とデザインを担当した。才気闊達な男であつたらしく、すでに在学中に学校の開校記念絵はがきセットをデザインしている。これを私はかつて「デザインの揺籃時代」展(一九九六年、松戸市教育委員会)で紹介したが、金属石版刷りによる構成主義風なイラストに写真を組み合わせたもので、好感のもてるデビュー作といべきもので、ここにtomのサインがあつた(図1)。作品制作よりも著作が多く、わけても一九三二年に彼が企画した『新興工芸シリーズ』全十五巻は当時のインテリア、染織、彫刻、照明などデザインの各分野で先端的な活動を展開していた西川と同時代の河内諒、豊口克平、土佐林豊夫などの若い論客を起用した意欲的な企てであつた。完結すれば、例えば新興芸術での『新芸術論システム』(天人社、一九三〇年)に比肩しうる日本デザイン史分野での大きな足跡となつたろう。残念ながら、金星堂から五冊のみが出版されただけで中断してしまつたが、『工芸叢書』(学術出版社、一九三五年)として何冊かが版元を変えて再刊されている。

この弟に友孝があり、彼は短命に終わった東京高等造園学校を一九二八年に卒業し、関東大震災後の新しい生活創造に見合った造園デザインとしての「庭園工芸」を提唱し、一九三一年創刊の季刊誌『建築・造園・工芸』(金星堂)の編集にあたり、蔵田周忠、市浦健、高村豊周、宮下孝雄など

一寸

第一号 二〇〇〇年一月

新・旧刊案内1 収書と散書

青木 茂

神田の古書会館で毎週金曜日に開かれている古書展の帰り道、近くの喫茶店「古瀬戸」に集い、その日の古書漁りの成果を自慢しあう仲間たちが、二〇〇〇年を期してささやかな文集を発行することになりました。果たして何号まで続けることが出来るか、はなはだ心もとないものがありますが、それぞれの出逢いを持った一寸に満たない古書・旧刊・刷り物から得た感懐の一端を、各々勝手に記してみようと思います。お心に触れるものがあれば足をとめて暫しの時を御持ち戴ければ幸いです。

書痴同人一同

第一号目次

新・旧刊案内1 収書と散書	青木 茂
機械木版覚え書	岩切信一郎
目録に無い図画教科書(一)	金子 一夫
渡部敏太郎『小学人体画学本』(明治十三年)	丹尾 安典
スコット乳菓と《海の幸》	森 登
『一宵話』と牧墨僊 銅版画異聞1	森 仁史
もうひとりのtom	山田 俊幸
古本歩き・横浜の巻 I	

高い書物を買ひこんで

おれはまたもや気がふさぐ

『中野重治詩集』より

◎女子学生が「オタツキーな人たち」とためらうことなく表現する仲間たちが同人誌を作るといふ。普通のはなれ小僧が十代でとち狂う同人誌を、今ごろになって作るという平均五十四、五歳の仲間たちの収書を見ていると本を集めるオタツキーも死ななきやなおらないとつくづく思う。高価な本を平然と買うのがある、ほとんど骨董買いの領域に入っている。実に安価な本をドツサリと買うのがある、ああいう本は田舎町の古本屋でも値段をつけなくて土間に平積みになっているものである。引越しの時に挟雑物を払い下げ清々とした顔をするのがある。何ヶ所かに散在させていて、本抛地にはあまり本を置いていないのがある。小さなひとつことに凝って小枝の枝葉を珍重するのがいる、なぜこんなむづかしい宗教書を買うのかと聞くと、説明が大枝まで行かないで日が暮れる。四十すぎでの道楽と四時すぎの雨は止まないとかいう、止みそうもない道楽である。

◎とはいえ、ここに集まった十人ほどの道楽の対象は美術一本に、しかもほぼ日本近代の美術図書に絞られる。日本美術といっても江戸初期には興味がないらしいし、個人画集があり時に展覧会場で見ることのできる作家、例えば横山大観や黒田清輝や文展・日展はほとんど無視するようである。

もつとも大観の子供向け歴史物語の挿絵―これが滅法にへたなのである―を喜ぶし、黒田清輝日記の第一巻は読み込んでいようである。私はこういう友だちを持てたのを喜びとしている。

◎さて、私は毎日一冊ぐらいの本を集めてきたような気がする。時々はお

のモダニズム論者の議論で誌面を充たした。天銀箱入りという凝ったつくりであったが、あまりにハイプロウを狙ったためか、雑誌としては短命に終わった。これまた、内容が時機に叶っていたせいか『材料の新研究』・『都市の新研究』・『技術の新研究』（金星堂、一九三二年）、『最新建築造園大観』・『最新工芸大観』・『新造形芸術大観』（吉田書店、一九三二、三四、三三年）として二度も再編集して公刊された。珍しいことである。

友武が同時代のデザイン界で一躍名を馳せたのは、一九三三年のアルミニウム家具国際競技（パリ国際局主催）の第二部（設計図案の部）で一等一席をえたことである。第一部（モデル提出）の一等はプロイヤーが獲得した。既にパイプ椅子の理念や機能性をデザインし始めていたヨーロッパ（出品の大半はフランス、ドイツが占める）のデザイナーに伍してのことであった。日本国内ではようやくアルミニウムの精練が実用化され、モダンデザインが生活のなかにそのフォルムを進出させようとしていた時に、アジアの無名デザイナーがそのデザインをヨーロッパの眼に認めさせるのは並大抵のことではなかったはずだ。この報告を主軸に『軽金属家具』（工業図書、一九三五年）が上梓され、その劈頭をやはり東京高等工芸学校出身の池田三四郎の撮影になる友武のポートレートが飾っており、その才氣溢れる面構えに接することができる。申し添えれば、池田は戦災に遭って故郷の松本に戻り、戦後は民芸家具の復興で名を成したが、戦前は『国際建築』をはじめとする建築ジャーナリズムで建物を専門とするカメラマンとして活躍していた。

これは私だけなのかもしれないが、デザイン史上の活動を追跡していると、その人物の行動がすべてかれの主義主張に従うものであるかのごとく思い込みがちである。この兄弟に若くして亡くなった兄友義があることを知ったのは西川友武の名に接してから大分後のことであった。友義（偶然にも知義と同音らしいが）は友武らとは違って、本所で開業医をしていた父友敬の意向を受け、一高から東京帝大医学部に進み、一九二三年卒業後直ちに陸軍見習士官となった。そして、自宅から軍医学校に通い始めた年

に関東大震災に会い、負傷した父を背負って本所被服廠に避難するのが目撃されて後、行方不明となった。友義は一高時代から『地上』同人として短歌を詠み、古美術にも関心が深かったという。友武が念願通り工芸に進んだ年に死亡したことになる。関東大震災は街や人を抹殺したのだが、一九二〇年代の新しい表現に舞台を提供したのでもあり、友孝友武兄弟はその波頭のなかに身を投じていったのであった。まさしくこの年が肉親の踵を接する境になったのであった。兄を追悼して二人の弟は『西川友義歌集』（私家版、一九三八年）を編んだ。窪田空穂が序文をよせ、友武が装丁し、友孝が編集した（図2）。ここには、友義をも襲った進路を巡って苦悩する若き日々が率直に詠われている。

相あはぬ性を持ちつゝ一つ室にかたみに住めばかなしも人は

おきふしを一つにしつゝある友をうとましくするさがはかなしも

友武・友孝はこれを追悼集とせず兄の全歌集としてまとめた。それは、二人の弟が兄の生と志を封印するのではなく、表現として命を保たせようとしたからであった。こうした彼らの姿勢から、父と兄の死に導かれた時代の大きな転換点を経て、別々な方向に歩み出した才能豊かな兄弟の心情の機微をうかがうことができる。これを読んだら、西川兄弟のデザインへのスプリングボードの

地紋に友義の面影が浮かんでいたはずだと思わずにいられないのだ。

西川友義歌集



2 『西川友義歌集』（1938年）